

## ハワイ人教会

### ハワイ人教会とは

会衆派のHawaiian Churchの定義には次の3つがある。まず、19世紀に宣教師によってハワイ人のために設立された、歴史的にHawaiian Churchと認められる教会。次に、教会の信徒がハワイ人であり、聖歌、祈祷、説教などが部分的にでもハワイ語で行われ、その他のハワイの伝統が継承されている、民族的・文化的にHawaiianと見なされる教会。最後に、1950年代に宗派の垣根を越えて設立された「ハワイ人教会州評議会(the State Council of Hawaiian Churches)」に所属する教会。会衆派のHawaiian Churchの中には、3つの定義を全て満たす教会もあれば、歴史的にはHawaiian Churchであっても自らHawaiian Churchでないと宣言した教会もある。

カトリックや聖公会、無宗派の教会の中にも、Hawaiian Churchと見なされる教会はあるが、ここでは取り上げない。また、“Hawaiian”の意味は必ずしも“ハワイ人(の)”に限定されないため若干の違和感が残るものの、“Hawaiian Church”の訳語として「ハワイ人教会」を用いることにする。



モクアイカウア教会

### 会衆派教会の変容

すでに紹介したように、ハワイにおけるキリスト教の宣教活動は、1820年、アメリカ海外伝道評議会(ABCFM)が宣教師団を派遣したことに始まる(*Glocal Tenri* 2011年1月号)。1823年に現地組織された「ハワイ協会」は、1854年に「ハワイ伝道協会(HEA: the Hawaiian Evangelical Association)」に改編され、1863年にABCFMがハワイの活動から退くと、独自の評議会(the Board of the HEA)を設置して、教会活動の現地化が進められた。

19世紀前半の宣教ターゲットは当然のごとくハワイ人であり、ホノルルのアメリカ人船員を対象とした教会を除けば、全ての教会はハワイ人教会、すなわちハワイ人信徒がハワイ語を用いて活動する教会であった。だが、サトウキビ産業が盛んになるにつれて各地で白人の定住化が進み、農園労働者として19世紀後半から中国人、日本人、ポルトガル人の移民が、20世紀初頭から韓国人やフィリピン人の移民が流入すると、会衆派教会も宣教対象をそれらの民族集団へと広げていった。

こうして20世紀に入ると、会衆派信徒の多民族化が進んでいく。例えば、1915年7月のハワイ島コナ地区のセントラル・コナ教会の信徒数は101名であったが、その民族構成は、アメリカ人10名、中国人3名、フィリピン人33名、ドイツ人2名、ハワイ人7名、日本人26名、韓国人2名、ポルトガル人2名、混血ハワイ人(アメリカ系)8名、混血ハワイ人(中国系)7名、混血ハワイ人(ポルトガル系)1名となっている。信徒の民族構成の多様化は、それぞれの民族集団に対応したエスニック教会の設置を促し、20世紀の前半、HEAは、ハワイ人教会、白人系のユニオン教会、日本人教会、中国人教会、フィリピン

人教会などから構成されるマルチ・エスニックな組織へと変貌していった。

HEAは独立した組織であったが、それでも本土の会衆派教会の組織運営の影響を受けた。特に、1957年、会衆派キリスト教会と福音派改革教会の合併により「キリスト合同教会(UCC: the United Church of Christ)」が設立されると、それを受けて1960年にHEAは現在の「キリスト教合同教会ハワイ協議会(HCUCC: the Hawaii Conference of the UCC)」へと改編された。この協議会は、HEAのシステムを引き継ぎ、ハワイ、マウイ・モロカイ・ラナイ、オアフ、カウアイの4地域の協会、および1994年に設置された「ハワイ人福音主義教会協会(the Association of Hawaiian Evangelical Churches)」から構成される。UCCは、上から「総会議(General Synod)」、「協議会(Conference)」、「協会(Association)」、「会衆(Congregation)」といったピラミッド構造を持つが、独立自治を重視する会衆派の伝統を反映して、それぞれのレベルで独自に意志決定を行うことができる点に特徴がある。

### 会衆派のハワイ人教会

現在の会衆派のハワイ人教会は、信徒数の上からもマルチ・エスニック化したHCUCCの中のエスニック教会の一つにすぎないと言えるかもしれない。また、信徒のほぼ全員がハワイ人であるハワイ人教会もあるが、ハワイ人信徒の占める割合が6割前後のハワイ人教会も存在する。数の上では確かに影が薄くなった感は否めないが、それでも1820年代から現在に至るハワイのキリスト教史において会衆派のハワイ人教会が常にその中心にあったことは否定できないだろう。

首長の教会であったカワイアハオ教会、平民の教会として親しまれてきたカウマカピリ教会、ハワイで最初に建てられたモクアイカウア教会、1830年代末の「信仰大復興」の中心となったハイリ教会など、歴史と伝統があり現在も活発に活動を展開している教会は多い。また、文化復興の流れの中で難しい舵取りが必要とされながらも、熱心なハワイ人牧師の指導のもと、ハワイ人教会としてのアイデンティティを確立することを目指して、教会活動の活性化を進める教会も存在する。

その一方で、田園部の小さなハワイ人教会の中には、正規に任命された牧師がいない無担任教会が存在する。しかし、そのような教会にも平信徒の牧師(lay minister)がおり、会衆のリーダーとして教会運営にあたり、他の教会の正規の牧師が定期的に訪れるようになっている。ハワイ人教会を担当する牧師は必ずしもハワイ人とは限らない。また、ハワイアン・ルネサンスや主権回復運動に対して、比較的リベラルな立場を取るハワイ人教会もあれば、極めて保守的なハワイ人教会もある。



ハイリ教会

## 初期の独立系ハワイ人教会

独立系のハワイ人教会の中に、会衆派の伝統の中から生まれた教会がある。ハワイ王朝が転覆した1893年に、ジョン・ケキピ・マイアによって創設された「ホオマナ・ナアウアオ（“なすべき霊的な礼拝”）」である（*Glocal Tenri* 2011年4月号）。会衆派教会の信徒であったケキピは、政治においても教会においてもハワイ人が主導権を握ることができない時代、HEAとハワイ王室の関係が次第に冷めていく中、会衆派教会を離れてハワイ人によるハワイ人のための教会を設立したのだった。彼の師であるポロアイレファが啓示を受けた年を教えの始まった年として、1903年にケキピが“創立50周年”の記念講演を行った母教会、ケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラマ教会は、ホノルルのダウンタウン、カワイアハオ教会から歩いて数分のところにある。

ホオマナ・ナアウアオの初期の教義の特徴は、「悔悛」の強調とそれを前提とした信仰治療にあった。儀礼的な特徴としては、夢の中で受けた啓示を重視する「夢見」、聖書を無作為に開けて目に止まった聖句に神意をはかる「ヴェヘ・イ・カ・パイパラ」、救済や啓示を得るべく祈祷と共に行われる「断食」などが上げられる。

ハワイ王朝の転覆により会衆派ハワイ人信徒の間で動揺が広がった20世紀末、ホオマナ・ナアウアオは、ハワイ人が主導権を握る教会として、また信仰治療を施す教会として、多くのハワイ人信者を獲得していった。同教団は、創設10年目の



ケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラマ教会 1903年には10以上の支教会を各島に持ち、1911年に宗教団体として公認を受けて、急速に勢力を拡大していく。HEAもその影響力を無視することができなくなり、病気に苦しむ会衆派信徒を強引に改宗させ効果のない治療を施している異端として同教団を非難した。ホオマナ・ナアウアオは、信仰治療を積極的に行う伝道活動から、後年、ハワイアン・クリスチャン・サイエンスと呼ばれることもあった。

## 分派する独立系教会

ホオマナ・ナアウアオの創設時、初期のメンバーの中にケキピの教義解釈に同意できず袂を分かった者たちがいた。このような会衆内での対立およびそれに引き続く分裂は、その後の独立系ハワイ人教会の歴史において度々繰り返されることになる。

ホオマナ・ナアウアオが“創立50周年”を祝った翌年の1904年、同教団の主要メンバーであったジョン・J・マシューズ夫妻を中心に「ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラ（Church of the Living God）」が活動を開始する。彼らは1911年に母教会のカ・マクア・マウ・ロア教会を建立し、1916年に公認を受けた。ところで、同教団の設立メンバーの一人に、ジョン・H・ワイズがいた。白人主導のHEAに不満を持ち、会衆派教会を離れたワイズは、ハワイ近代政治史においても重要な人物の一

人であった。彼は、ハワイ人に土地を与えて“更正”することを目指した「ハワイ人宅地委員会法（the Hawaiian Homes Commissions Act）」の成立に向けてクーヒー王子と共に



カ・マクア・マウ・ロア教会

尽力したことで知られる。1921年に成立し今なお効力を持つ同法は、現在のハワイ政治において論議を呼んでいる法律である。その成立のプロセスや先住ハワイ人の主権問題との関連性については、Kauanui (2008) に詳しい。

ワイズは、1919年に教団の筆頭牧師となり、彼の強力な指導力のもと、ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラは勢力を拡大していった。こうして同教団も幾つかの支教会を持つことになるが、やはり、その中から独立する教会が出現する。1990年代中頃に確認できた教会として、ラナキラ教会、「エカレシア・オ・カ・マウナ・オ・オリベタ」、「ケ・アライ・オ・ナー・アライ・アー・メ・カ・ハク・オ・ナー・ハク」などがある。いずれも1930年代から40年代にかけて、ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラから独立した教会である。

## 独立系ハワイ人教会の現在

独立系ハワイ人教会の教義や儀礼体系は、年を経るにつれ教会毎に変容しているようである。現在、ホオマナ・ナアウアオは、信仰治療を前面に押し出すことはせず、断食も行っていない。一方、ホオマナ・オ・ケ・アクア・オラでは、年頭の断食期間が定められており、1978年に現在の筆頭牧師を選出した際には、教団幹部たちが断食中に見た夢を手がかりにしたという。また、伝統的な問題解決法であるホオポノポノを公式活動として取り入れている教会もあれば、通常ホオポノポノとして家族単位で行っている教会もある。

独立系教会は、最大規模のホオマナ・オ・ケ・アクア・オラを除けば、親族中心のファミリー教会と言って良いだろう。いずれの教会もプロテスタントを名乗っているが、会衆派教会に出自を持つとは考えていないようだ。また、各教会間の関係は希薄であり、ホオマナ・ナアウアオに始まる独立系ハワイ人教会の伝統を引き継いでいるという意識も低い。信者にとっては、ある教会から自分たちの教会が分派したというよりも、自分たちの教会の創設者がかつて別の教会の信者であったにすぎないということなのかも知れない。

ところで、ホオマナ・ナアウアオでは1990年代以降も教義や教会運営を巡る意見の対立から分裂するグループが出てくる。分派・分裂の傾向は、独立自治を重んじる会衆派の伝統に起因するのか、それともハワイ文化の特性なのか、それとも複合的な要因が働いているのか、検討を要する問題である。

[参考文献]

Kauanui, Kēhaulani J. (2008) *Hawaiian Blood: Colonialism and the Politics of Sovereignty and Indigeneity*. Durham and London: Duke University Press.